

黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。そこで村人は人柱を立てることにしました。昔は堰が決壊するのは祟り^{たた}のためで、人柱を立てて祈禱^{きとう}することにより堰が守られると考えられていたのです。村人は縦縞に横縞の継ぎ当てをした着物を着て通る人を人柱にすることに決め、あちらこちらの道の辻^{つじ}などへ立ち、縞の着物を着た人が通るのを待ちました。

毎日毎日捜しましたが、どうしても遭うことができませんでした。ところが三、四日たったある日の夕方、年配の遍路さんが足早に通りすぎようとしてきました。着物は縦縞でした。この人も横縞の継ぎなど当ててはいるはずがない、と思いながら通りすぎようとする遍路さんを見ると、なんと横縞の継ぎあてをしているではありませんか。

村人は、その遍路さんの足を止め、事のいきさつを話し、人柱になっていただくことを祈る気持ちで懇願^{こんがん}しました。遍路さんは天に向かって祈り始め、しばらく祈ってから急に口を開き、「私は天涯孤独^{てんがこどく}です。この世に生きるだけ生きて来ました。もう残りわずかですから、大勢の皆さんのお役に立てることがあります。喜んでお引き受けしましょう」と言いました。村人はよろこび、その遍路さんを迎え入れ、丁重におもてなしをしようとするとともに、その夜は涙ながらに別れを惜^おしんで夜を明かしました。

翌日、村人は堰のそばに大きな穴を掘り、遍路さんを入れました。穴からは節を抜いた大きな竹の筒が地上に出ていましたので、竹筒の底からは「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と読経^{どきぎょう}が聞こえ、それに唱和してうして堰はできあがり、人柱の霊力により怨霊^{おんりょう}の怒りは鎮まり、大洪水でも絶対に堰が切れることがなく、大早魃^{かんばつ}でも不思議に堰の水が涸れることがなくなりました。それ以来誰言うともなく、この堰を「念仏堰」と呼ぶようになりました。



背景

昔、高知県黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。村の人々は堰が決壊するのは祟り^{たた}のためで、人柱を立てて祈禱^{きとう}することにより堰が守られると考えました。しかし、誰を人柱にするのかとなると、みな口をつぐんでしまいました。その中で、ある村人が、昨夜見た夢の中で、神様から「遠からずこの辺りを、縦縞の着物を着て、それに横縞の継ぎを当てた人が通る。その者に人柱として立つことを頼むが良い」とのお告げがあったことを話しました。村人はこの話に賛同し、縞の着物を着た人を待つことにしたのです。

アクセス 念仏堰 (加持川)

- 土佐くろしお鉄道土佐入野駅より北へ直線距離約2 km
- 黒潮町加持
- 緯度経度 北緯33度02分37秒, 東経133度00分40秒

